002
いざtonbi へ

駅から車で長い道のりを経て、到着。ぽっと目に入るのはビンクの外壁。必要以上に飾ることはせず、シンプルな外観でした。
中に入ると控えめに音楽がかかり、お客さんの話し声も静かで気にならず落ち着いた印象。
ゆったりとした時間が流れ、日差しの強い外とは対照的に涼やかな空気を感じました。
コーヒー豆の香りほのかに漂う…
普段あまり喫茶店を利用しない私にとっては少し憧れていた世界でした。

003
マスターに語る

マスターの第一印象は「静かな人」。でもすごくこだわりを秘めているのではないかと思い取材を始めました。
いざ始めると、すらすらと話も進み意外におちゃめかたで、時折見せる笑顔も素敵でした。

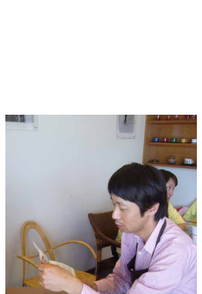
ートonbi の由来って何ですか？
取材前から絶対に聞きたかった質問だったので、スパッと聞いてしまったところ…
「思いけき、ひらめきです」と意外にあちゃめな回答でした。（笑）
「ふんでは、ひらがな3文字で、子供からお年寄りまで幅広く分かりやすいから」
奥さんと自転車に乗っている時に空を自由に飛び回るとんびを目にし、世界中のコーヒー豆の産地を飛び回りたい、という意味も込めてお付けたそうです。

お店のプレンドコーヒーの名前も少し変わっていました。
「ふつうの名前だとつまんない、おもしろくないよね」
「これじゃ想像つかないでしょ」
例えば“ヒムロのくちばしブレンド”は一番飲みやすいそうですが、「入り口」という意味でくちばしと名付けたそうです。

004
喫茶店へのこだわり

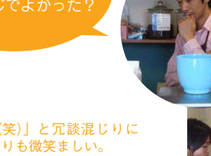
「親がコーヒーを飲んでいて、コーヒーは身近な存在だったかな。コーヒーは飲まないけど、喫茶店という場所はそのころから何となく興味があったよ。学生の頃、高いお金を出して高級な飲食店に行かないまでも、程よい値段で気軽に行ける“大人の世界”、“ちょっと背伸びした”感覚を味わうのに喫茶店はぴったりだったね」
喫茶店は「コーヒーとケーキのSHOW ROOM」だと語っていました。
tonbi coffee はロコミで広がっているそうで、幅広い客層に支持されています。私たちが取材に訪れた時には、夫婦、カップル、女性が1

どもはとんびのくちばしプレドを、えりかは tobi-iro ブレンドを注文しました。深い味わいがあり甘みも少、口のなかに爽やかなコーヒー豆の香りが広がり、後味もすっきりとしていました。手作りのケーキも絶品！



005
喫茶店へのこだわり

［写真右］コーヒー豆を焙煎するお機械だそうで、お店に入ってすぐ目に付きました。大きいなんと驚いていましたが、これでもかいさいなのだそう。



キフトは
商品も品揃え豊富。
パウチーなども
ラッピングで誰にでも
喜ばれそう！

人で、男性が1人で、というように、年齢、性別も様々でした。しかし、どこかカフェに通うような“おしゃれで”、“ただわり”を感じました。
「喫茶店の“敷居”を高くしたくない」
「気軽にコーヒーを飲んでほしい」
「でも、そうすると昔からの喫茶店が好きな人は来れなくなるんだけどね」

さすが喫茶店のマスター、豆に対するこだわりは強いのでしょう。豆について語り始めると止まらないほど。
「コーヒーの系統はワインと違って、まだ国内では“無秩序”。それがおもしろい」
そんなただわりの豆はオンラインショップでも購入できるので、全国各地にファンもいるそうです。

006
高崎とマスター

マスターは高崎出身。世田谷の喫茶店で勤めた後、なぜここ高崎で出店したのかと聞くと、
「東京は刺激が多いし、東京の方が好き…かな (笑)」
ごまかしつつ、東京の方が好きだと告白して下さいました。
「でも都内でやろうとは思わなかったね。どうせ店をやるなら、生まれ故郷かなって」
なるほど、高崎には都会に出た人をも引き戻してしまう魅力があるのでしょう。

う〜ん…あっ、
これは脱線しすぎたかな、
こんな感じでよかった？

聞きたかったことの他にも、自分のこだわりをどんどん話してくれる間庭さん。話が広がりすぎたのを心配してくださいました。

「今、いじめられてるんです（笑）」と冗談混じりに話す諸角さん。何気ないやりとりも微笑ましい。

007
高崎とマスター

マスターの間庭さん。
営業中で忙しい中、快く取材を受け入れて下さいました。

スタッフの諸角さん。
笑顔で接客なさっていて、あたたかいお店の雰囲気をつくっていました。

ケーキ担当の菊間さん。
素材にこだわったおいしいケーキを生み出す、お店の第２の顔。

—高崎の魅力って何だと思いますか？
「適度に山、畑があるけど、都会のような要素もあるし、東京も程近い」
(私自身も、高崎は近代的な建物がある一方で、後ろを向くと山、畑…とにかく緑ばかり !! と感じました。)
「何もないところが魅力だよね。でも何でも揃っていて、意外に粒ぞろい」
都会でもなく、田舎でもない。それが高崎。

tonbi coffee は“こだわり”の場…
マスターだけでなくお客さんも一緒にこの雰囲気をつくっているのでしょう。

お好みで
メニュー以外も
できます！

http://www.tonbi-coffee.com

vanotica http://vanotica.net/takap1/
慶應義塾大学　加藤文俊研究室　場のチカラプロジェクト _ 高崎 2010.5.15〜16
編集 _ 多山えりか　デザイン _ 馬場葉子

Curio City

店のない本屋さん

ここに綴られているのは、
中心地からはずれた新旧入り混じる
不思議な街並みと、
ヴィンテージ絵本が人知れず並ぶ
場所「curio books」の
２つの世界を行き来した、
小さな旅の記録です。

たった２時間の旅を通して、私たち
が見た高崎へとご案内します。

ヴィンテージ絵本専門店「Curio Books」に
取材に行く私たちは、
店まで 2.5km の道のりを歩くことに。

が、街並みがなんか変だ。

新しい住宅と廃墟が並んでいるし、
真っ直ぐ歩いても道幅がグネグネと変わる。
路上に置かれた物や看板に
ツッコミを入れながら歩いていく。
が、絵本のお店を目指して歩いているのに、
そんな 匂い は少しもしない。

不安になりつつ、ヘンテコな風景を
楽しみつつ、迷った挙句、電話。
登場したスタイリッシュな店長に案内されて
たどり着いたのは、とても素敵な" 家" でした。

ようやくたどり着いた「Curio Books」。

自宅の一角を書庫として利用し、
海外のヴィンテージ絵本のインターネット販売を行っている、
店舗を持たない本屋(とねぎ)さん。

店長は、生まれも育ちも高崎の渡木さん。

本が大好きで6年前に古書店を始めるが、
1年で店舗をたたみ、現在の形になったと
いう。絵本は、世界各国から独自のルート
で仕入れている。
現在日本国内で海外のヴィンテージ絵本
を専門に扱っているのは、
ここ「Curio Books」だけ。

「一番のお気に入りの本は何ですか?」

奥から出してきてくれたのは、その名も

「読めない絵本」

8ヶ国語で書かれた文章が重なり合っていて、
どこから読んでいいのやら。

中を開くと赤と白の鮮やかな配色。

よくわからない。
でもなんかおもしろくて、きれい。
じっと見とれてしまった。

最後に…
「絵本のことを考えているのが楽しい。」

心から楽しみながら働く渡木さんが、
笑顔で話していたのが印象的だったなぁ。

そんな「Curio Books」に集められた作品は、
高崎市内の雑貨屋「jam cover」や
「Slow cafe」で販売や展示もされている。

「あんまり郷土愛は持ってないんです」

「アナログな空間へのこだわりは、
全然ないですね」

と言いながら、地元高崎にも
その至高の作品たちと共に過ごせる空間は
用意されている。

各国のコレクターとの多様な
ネットワークを持つ小さな場所
「Curio Books」。

一見、私たちが歩いた高崎の街とは
なんの関係も無いように見えて、
この街を訪れた人びとは、
知らないうちに、
渡木さんが集め、つくり出した世界の
虜
とりこ
に触れているのかも知れません。

「Curio City 店のない本屋さん」
発行：2010 年 5 月 16 日
取材・編集：臼井隆志，森部綾子
協力：宇田川眞也
スペシャルサンクス：渡木章浩 (Curio Books)

慶應義塾大学 加藤文俊研究室
高崎ブレーバドワーク 2010 年 5 月 15 日〜16 日
http://vanoticia.net/takap1/

高崎清蹴来

2010年5月15〜16日
慶應義塾大学 加藤文俊研究室（場のチカラ プロジェクト）
高崎フィールドワーク http://vanoticа.net/tokop1/

石山睦弓・田島悠太

星野宏明

■高崎に帰る

星野さんは19歳の時に上京し、HYATT REGENCY TOKYOで10年間の修業後、高崎に戻ってきた。その星野さんが目にしたものは、小さなこだわりの老舗がなくなり、ワンランクや居酒屋チェーン店がずらり並ぶ高崎だった。中華料理一筋だった星野さんは「高崎に新しい風を送りたい」という想いからCHINESE FANをオープンした。

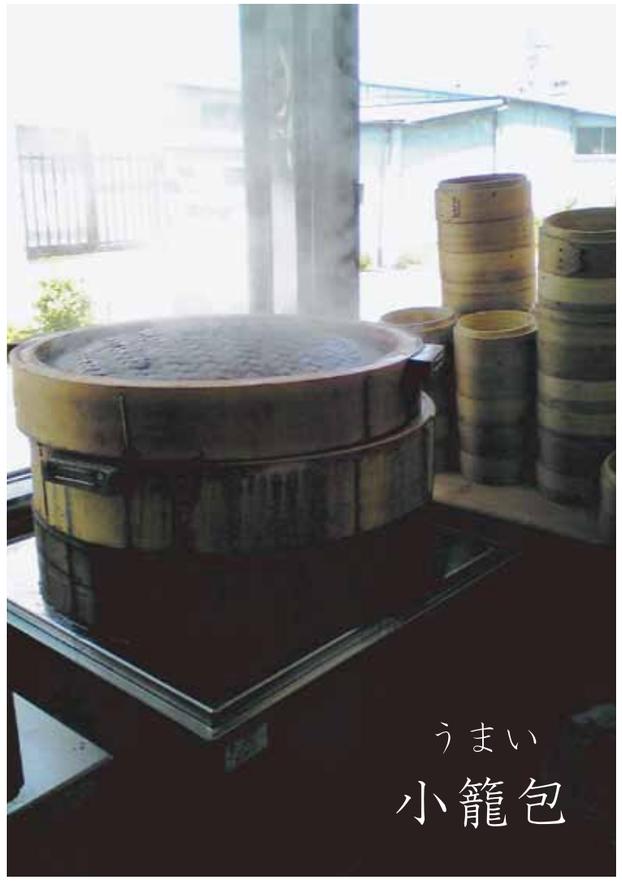
■高崎にぶつかる

今では、高崎の名店となったCHINESE FANだが、オープン当初には、苦い経験がありたという。「最初の一年はやっぱりダメだった。毎日小籠包を仕込んでもお客さんが来ないで、作っては捨てていく（毎日だった。それでも、一番美味しくて一番鮮度の良い食材を出してきたから今があるん」ロコミでわ店の評判が広がっても、想いは変わらない。お店を開いて8年。高崎のまちにお籠包を定着させた、星野さんは自負する。

■高崎から上海へ

夢は上海で日本の食材を使った小さな中華料理店を作ること。本場中国で〝ジャパニーズ中華〟という新しいジャンルの開拓に挑戦したいと星野さん。もちろんどこでも群馬の生きのいい素材を求め出使いたいというこだわりこそ。その未来のために今は高崎の三店舗で、全力で新しい風を送り続けてゆく。

高崎からの旅立つのはそれだけではない。CHINESE FANの厨房には、群馬だけでなく、各地から職人が集まり、星野さんの厳しい指導を受けている。「厳しく教えているよ。でもみんな目標がはっきりわかっていて、将来の巨匠は群馬から羽ばたいてゆく。



■高崎が小籠包に出会う

高崎の小籠包はCHINESE FANから始まったと言っても過言ではない。2002年に店長の星野宏明さんが店をオープンさせた時、高崎の人たちは小籠包を知らなかった。「最初は小籠包って何？という状態だった。小籠包の食べ方も知られていなかった。でも今では、高崎での小籠包はウチと言ってもらえるようになった」

■高崎で小籠包を作る

CHINESE FANの小籠包はオーダーを受けてから作る。これは「できたては最高の味付け」という星野さんのポリシーから来ている。ところがこれ、実はかなり難しい。「できたての小籠包は群馬ではまず味わえない。だからこそやりたかった」と星野さんは言う。

星野さんはCHINESE FANの小籠包を「群馬らしい小籠包」と呼ぶ。食材として使う小麦粉や豚肉は群馬県産のものを使うことが多いからだ。

■高崎を小籠包で元気にする

世界中のグルメが小籠包を食べにこの店にやってくる。来客の実に9割が小籠包をオーダーするという。ミシュランでは一つ星を獲得し、市内に三つの店舗を切り盛りする。もちろん現状に満足している訳ではない。今の高崎には、安全性が不透明な食材を使う安くて大きい店がのさばっていると星野さんは嘆く。最近はフードアナリストの資格を取得するなど、サービスの向上にも余念がない。しかし、東京に進出する気はないとは星野さんの弁。自らの小籠包で高崎を元気にするため、星野さんは高崎の三店舗に全力を注ぐ。

■高崎の送風機

高崎に新しい風を送る「送風機（FAN）」にちなんで名付けられたCHINESE FAN。小籠包以外にも、この店に詰まった星野さんのたくさんのこだわりが高崎に送風されている。

■高崎の、とある民家の、おもてなし

今回、ぼくたちは道に迷ってしまった。というのも、大きな道を一本入った中に、しかも民家と見違えそうな雰囲気でCHINESE FANはあるからだ。実際、お客さんの多くはロコミ経由でやってくる。星野さんは「一般家庭を改装した店が東京にあってそれに影響を受けた。お客さんには家にいるようにくつろいで欲しい」と願う。

■高崎から、ではなく、高崎へ。

星野さんは「地産地消」という最近流行のキーワードには否定的だ。星野さんは「地産地消と言うけど、この土地の食材というだけならそこら辺で買える。せっかくの外食なんだから、お客さんたちには珍しいものを食べさせたい」と語る。その言葉通り、使われている食材は各地から星野さんが探しまわり、買い付けた食材ばかり。今は山形県の月山でしかとれない〝月山竹〟が旬。この竹は、ゆでるだけで、調理せずとも食べられる。高崎の食材だけで料理を作るのではなく、世界各地で集めた食材で料理を作り、高崎へ発信してゆく。

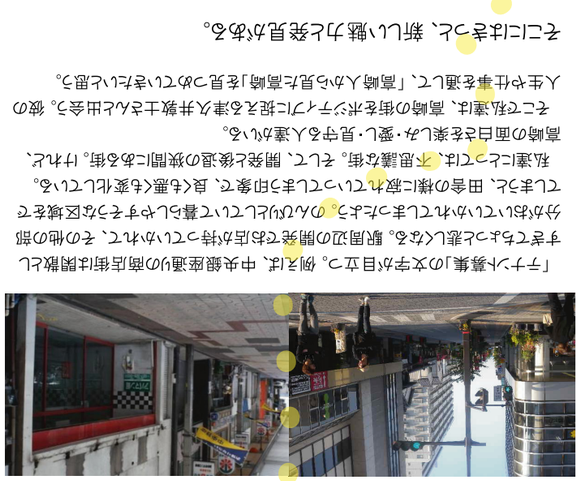
HOW TO EAT 小籠包

美味しそうな小籠包。

つゆにつける。

口へ運ぶ。
肉汁を味わおう。

外からも店の様子が
わかるよう工夫が
施されている。



vanotica

「生まれ育った街が高崎でラッキーだったね」

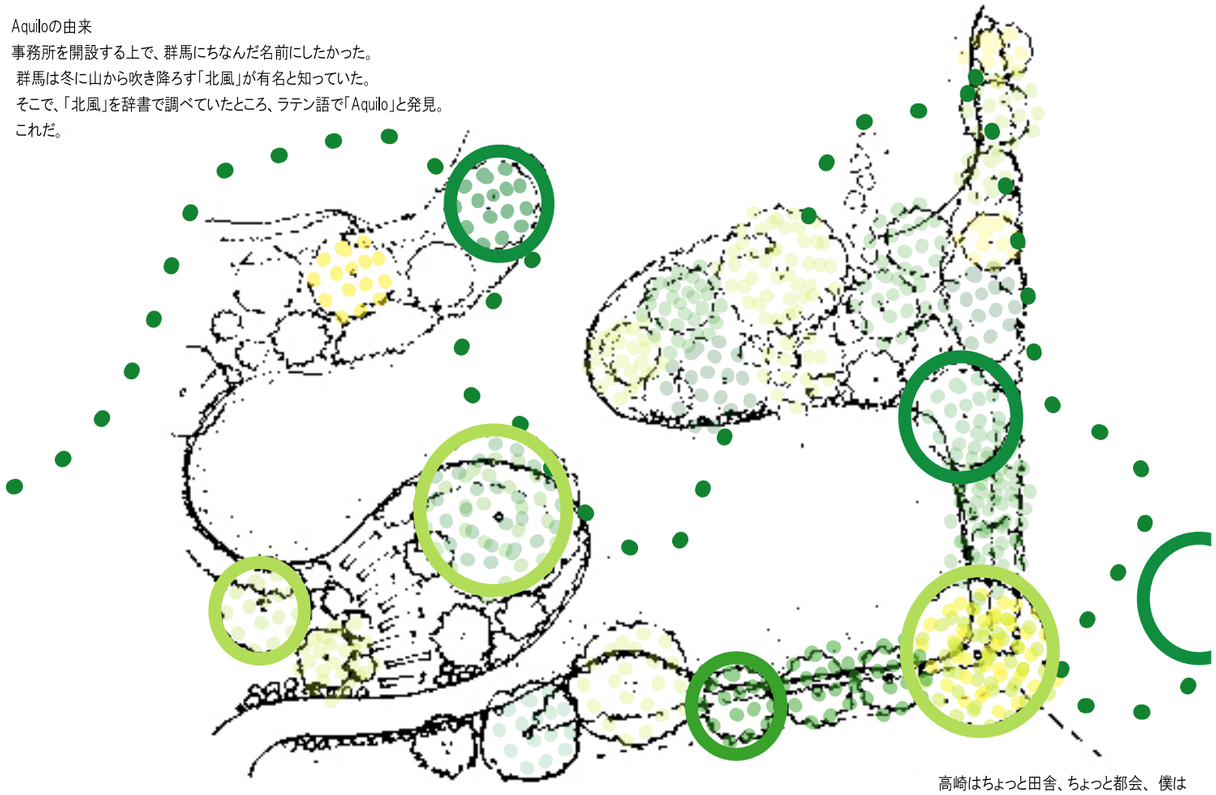
by 津久井敦士

2010年5月16日発行
慶應義塾大学　加藤文俊研究室（場のチカラプロジェクト）
高崎フィールドワーク　http://vanotica.net/takap1/

崔祐美
横尾仁美
荻原貴男

高崎はちょっと田舎、ちょっと都会、僕は
それを楽しんじゃってる。

Aquiloの由来
事務所を開設する上で、群馬にちなんだ名前にしたかった。
群馬は冬に山から吹き降ろす「北風」が有名と知っていた。
そこで、「北風」を辞書で調べていたところ、ラテン語で「Aquilo」と発見。
これだ。



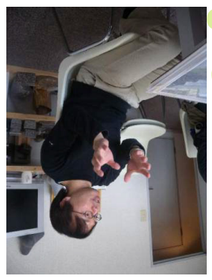
「私達から見た高崎」

話の中だけでの高崎のイメージは、「ないない尽くし」でした。人とか歩いてないのではないか、お店とかやってないのではないー・・・・もかして何もないんじゃないか！？ひどい考えだけど、ネガティブな要素ばっかり考えていた。
実際に高崎にきてみて感じたことは、駅周辺は開発されて賑やかだったし、思っとりよ上に都会だった！という驚き。フサと商会ブーブラザ〜の道は、歩道と車道がキレイに整備されていて、統一感がじ地よかった。今日みたいにお天気がいい、歩いていて気持ちいい。
お店は個人店が多々ォ ティスブルイはヒンズ良くて見ていて楽しい。下手すると首都圏より也週しやすそうっていうのが、高崎に来て一番初めのイメージ！でも、いざ街を歩いてみると現実に直面。

「チチ ンド募集」の文字が目立つ。例えば、中央銀座通りの商店街は閑散としすぎてちょっと悲しくなる。駅周辺の開発された店が特っていかれて、その他の部分がおいていかれてしまったよう。のんびりしていて暮らしやすそうな区域をでしょうと、街含の懐に抱れていてしまう印象で、良くも悪くも変化している。
私達にとっては、不思議な街。そして、開発と後退の狭間にある街。けれど、高崎の面白さを楽しみ・愛し・見守る人達がいる。
そこで私達は、高崎の街をボッティンブに捉えるつ津久井教士ろ。彼の人生やお手を通して、「高崎人から見た高崎」を見つめていきたいと思う。

そこにはまっと、新しい魅力と発見がある。

ラジエターデザイナー
津久井敦士さん



■ラジエターデザイナーとは
Aquilo(アクイロ)での仕事は、商業施設ラジエーターや公園・個人庭の設計を行っている。デザインをする上では、構造や材質・植物(樹種)・生態系・土水の知識など、私たちを取り囲む環境すべての知識が必要とされる。
植物を扱うため、季節や樹の成長など「時間の経過」を意識しなければいけない点が建築設計とは異なる。

■津久井さんがラジエターデザインを目指したきっかけは
高校1年生の時、家族旅行でヨーロッパへ。そこで、イギリスの公園「ケンジントンガーデンズ」に感動し、自分も空間の設計に携わりたいと思うようになった。この経験から、大学は建築ではなく、公園等の設計が学べる学科に行った。

■そんな将来への刺激をうけた高校時代：高崎高校について
高崎高校は男子校で、県内では最も信頼感のある高校の一つ。しかし、群馬県内で歴史のある進学校にも関わらず、具体的な夢や目標がないまま、なんとなく偏差値の高い4年生大学を目指す人が多い。
そんな中、津久井さんは高校1年生という早い時期に夢を見出した。個人で設計事務所(Aquilo)を運営しているが、高崎高校卒ということが県内で仕事をする上で、有利になることもあった。

「毎回一人コンペをやってる」
ラジエターからは仕事をもらう為には一人コンペで優勝しなければいけないようだ。優勝したモノが初めて、ラジエーターの共同作品になるのだ。そこから数回の話し合いをかさねる。相手のわかりやすい言葉を選びながら。「一年中花が咲いてる家にしたい」「色んな種類の紅葉が見たい」「お風呂から坪庭が見えるようにしたい」ラジエーターの要望に答えるとプルプルを考えている。

部屋から山が見えるように小さい木を植える。紅葉を様々な場所で楽しめるよう、木の色を分けて植える。空間が広く/高級感あるように見せるため、階段を直線的につくるのではなく、ブーチ型につくる。デザインだけを担当するわけではない。デザインを考えた後に、実際自分の足で工場へ出向き、モノの仕上がり確認を行う。現場に何回も行き指示を出す。このようなプロセスを積み重ね、ラジエーターをいろんな作品ができるのだ。
作品をつくるためには「みんなのことを把握してなきゃいけない」

ラジエーターのことはもちろん、そこに育つ植物のこと、そこにあるヨのこと、そこのある水のこと。
ーつでもズれたらネは枯れてしまうし、倒れてしまう。

「お客さんの先にあるものはなのか。先を見て提案する」
「作品が自己満であるのではなく、その先に満足させたいんがいる」

僕は、そういう作品しかつくれない。
むしろ、そういう作品しかつくらない。

カドモジ

1　高崎　ーゆったり、やわらかくー

「高崎はねー。建物はなんだかどんどん新しくなってるんだけど、人が少ないんだよね」
休日の朝。開いている店はほとんどない。住民は皆大抵昼過ぎから、気まぐれに店を開ける。
有名チェーン店は揃っていても、外食する人は少なく、移動も車。道に人は少なく、静かな街。
必要最低限の買い物は出来るし、自然もある。物価も高くない。
気ままな生活。
そんな高崎で、ウェブ素材制作やフォントデザイナーの仕事をしている、加藤雅士さん。
渋練された作品のデザインと違い、どこにでもいる朗らかな人。
ほんのり温かい、そして静かな街そのものようにような印象を受けた。

名古屋、大阪、東京と三大都市への居住を経験した加藤さん。
都市部は魅力も多いけど、人々は常にせわしない。メ切が明日なんて案件ばっかりだから、それに追われて短期的な視点しか持てない。仕事も、日常も。
「その点、高崎は時間の流れがとてもゆったり。都市部との物理的距離もあるから、クライアントさんが心に余裕を持たせてくれる。扱ってるのはデータなのにね」
その分、必ず月に一つはフォントを作るマイルールを設けて、仕事量の配分はきちんと。質もアイデアや工夫を盛り込んで最高のモノにしていかないと食べていけない。そう、フリーデザイナーは笑った。

2　手書きフォント　ー無知の知ー

学生時代は、美大で工業デザインを専攻していた。
「手先が器用だったので、削るとか、磨くとか、そういうのが好きだった」
Ｐこなんで絶対苦手。そんな先入観。
けれど大阪でデザイナーとして就職して、必然的にパソコンに触れて。
当時はパソコンも、ブラッシュやオリジナルフォントも爆発的に流行って。
「１０年前。まだパソコンの、どんなソフトで何が出来る、何が出来ないが何もわかっていなかったから。ある意味自由だった。自分独自の方法で開拓していった」
フォトショップもブラシツールも、当時は今ほどノ難しいソフトじゃなかったそう。
イラストを描くのにイラストレーターは使わない。
３ＤもＨＴＭＬも無理やり全部ブラシツールで作る。そんな無理やりな使いかた。けれどそれが受け入れられた。

「今はパソコンも普及して、文字は読みやすさを追求するようになって、そんなデザインのフォントが沢山ある。それには勝てない。けれど〝書く〟文字、書き手の気持ちが伝わるような、あったかみのある文字がウェブで表現出来たら」加藤さんはそんな想いで、手書きフォントシリーズを生みだした。

3　これから　ー願えば叶うー

加藤さんの現在の仕事に加え、半年前から新たに計画しているものがある。
話題沸騰中の iPad。そのコンテンツとなる電子書籍や待ち受け画面用素材のサイトだ。
「（iPad は）まだまだこれからどうなるかわからない。だからこそやる価値がある」と目を輝かせて言う。１０年前のように、自らも開拓者になれたら、と。
「都会にいると〝最新情報〟に踊らされて、知らずうちにあれは出来る、これは出来ないという固定観念に捕らわれてしまう。対して、高崎はブログもやらない、iPhone すら知らない人たちばかり。関心がないのかな（笑）だからある意味とても自由にチャレンジ出来る。」

そうして今も、アイディアの蓄積だけじゃなく、マーケティングの観点から勉強している加藤さん。

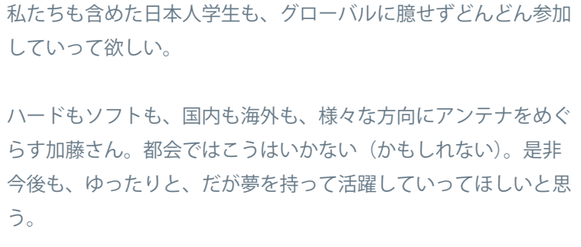
「今の生活は、ＩＴの進化じゃなくて人の気持ちの進化だ。こうなればいいなって夢見ながらやってる事が、そのまま夢の実現になる。」
クリエイターとして歩んできた人の言葉が、胸に響いた。

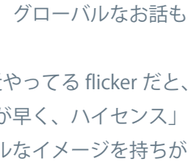
ウェブを通した仕事をしているだけあって、グローバルなお話もあった。
「今のお客さんはアメリカも多いけど、最近やってる flicker だと、中国人が多い。中国人の学生は優秀！仕事が早く、ハイセンス」
違法コピーの氾濫、上海版万博など低モラルなイメージを持ちがちの中国だが、流石は成長市場。特に学生に成長意欲が高いそうだ。また flicker は写真を中心としたコミュニケーションツールなので、簡単な会話で済むのがグローバル的に好都合な部分も多い。私たちも含めた日本人学生も、グローバルに臆せずどんどん参加していって欲しい。

ハードもソフトも、国内も海外も、様々な方向にアンテナをめぐらす加藤さん。都会ではこうはいかない（かもしれない）。是非今後も、ゆったりと、だが夢を持って活躍していってほしいと思う。

あゆむ、あいこ、りゅうのすけ、しんたろう・・・
「手書きフォント」の作品名は、その年うまれた子供で最も多かった名前を採用しているのが特徴だ。
「数十年後、そのムがこのフォントを使うことをイメージした」

確かにメーカやプロダ、ツイッターなど私たちはいつのまにか統一された文字の種類で書いている事が多い。これがエーザーごとに違う筆跡、また書く状況や送るシステムエーシェンによって違う筆跡で書けたら、とても楽しいのではないだろうか。





広告も出さず、インターネット販売もせず、ホームページすらない。しかしメルスマーケットには、通い支え続けるお客さんが、確かに、いる。この街に住んでいた人が、他の土地に暮らすようになっても通い続けたり、口コミで伝わり、広まっていったり…いわば、人が人を呼んでいる。このお店の話が誰かに伝わり、さらにほかの誰かがお店に足をはこぶこともある。「この扉をくぐって店に入ってきてくれることが、何かの縁。どこでどうつながりが生まれるか、わからない」販売の現場でたくさんの人と向き合ってきた竹澤さんの言葉には、実感がこもっている。

「当たり前のことが当たり前にできる奴に『当たり前じゃない』ことができる」これは竹澤さんが社長さんから、働きはじめた頃に言われたことだそうだ。竹澤さんは、店の周りの掃除と、朝の水撒き、道を行き来する近所の方々とのあいさつを欠かさない。いま流行している服に満足せず、次にお客さんに着てほしいものを考え続ける。気持ち良く買い物をしてもらうためになにができるか考えて、動く。当たり前ではない細かな気くばりを「当たり前のこと」として積み重ねる彼には、当たり前ではない流儀（ファッション）を感じた。

これからもずっと、店舗に立ち続けたいと言う。それは、お客さんが、懸命に働いたお金を使って、喜んで商品を買ってくれる場面に立ち会えるからだ。しかし、華やかな世界に見えるアパレル業界に憧れる人は多い半面、裏では辛いこともたくさんある。他のショップでは、スタッフの入れ替わりも激しい。ただ彼は、不満を言いながら仕事をするよりも、たとえそれが与えられたものでも、「まず自分が輝くことから」はじめる。その姿は、常に前向きだ。

どんな人と出会って、出会った人から何を学ぶか。その積み重ねが、財産になる。1日に、ひとつでいいから「何か盗んでやろう」と思わなくてはいけない。それは社長からであり、お客さんからもたくさんのことを学ぶ。だからこそ、彼にとってやりたいことは、接客なのかもしれない。プロであると同時に、楽しんで好きなことを仕事にしている。「接客がいちばん好きなことだからこそ、続けられる」そして、その積み重ねから生まれる楽しい空気を感じるために、お客さんはここに、戻ってきたくなるのかもしれない。

現実的に、経済の状況が悪くなったとき、衣食住で最初に切られるのは、衣である。だからこそ、そうした状況でも買おうと思ってくれるのは、どんな服か。ずっと考え続けているように見える。生活に必要な「衣」を提供したいという気持ちで、お客さんの暮らしを想像しながら、考える。着飾るファッションとしての洋服ではなく、人が生きるため、人を活かす服を、届けたいお店。それが、竹澤さんが守っているメルスマーケットなのだ。

35 年間ものあいだ、高崎の地で親しまれているお店がある。市内はもちろんのこと、県内全域、埼玉、長野、新潟などが外からも、この店をめざして、高崎へと足を運んでくる。アーツのレッドウィングを日本で最初に取扱った店のひとつでもあり、群馬県でここだけが正規に取り扱うシャツなど、商品の質も、品揃えも申し分ない。

でも、お店に「特別さ」を作り出しているのは、別の理由があるようだ。

3代目店長の竹澤吹雪さん（33歳）は、仕入れから販売まで、ほぼ一人でお店を切り盛りしている。365日24時間、いつも頭の中では、お店や仕事のことを考えている。

仕入れる靴や洋服は、そのほとんどが「着てくれるお客さんが見える」もの。常連のお客さんについては、顔やファッションスタイル、今まで買った商品などの情報を、ほとんど記憶している。お客さんに「ここでしか出会えない服」を提案するために積極的にお客さんの懐に入って話を聞く。普段から、何にでも興味を持ってみる。興味が凝り固まってしまわないように、アンテナを張り続け、お客さんのためを想う。そうすることで、お客さんとの会話も弾み、ほんとうに必要な洋服を提案することもできる。

高崎人は「いつもとちがうを開けている」ようなもの。
口調は強く、言いたいことを言う。
そのかわりに、まったく裏はない。

彼は毎日が楽しいという。
起きたときは「今日は何かいいことがあるし」と思い、
寝る前は「今日は一日よく頑張った」と思う。

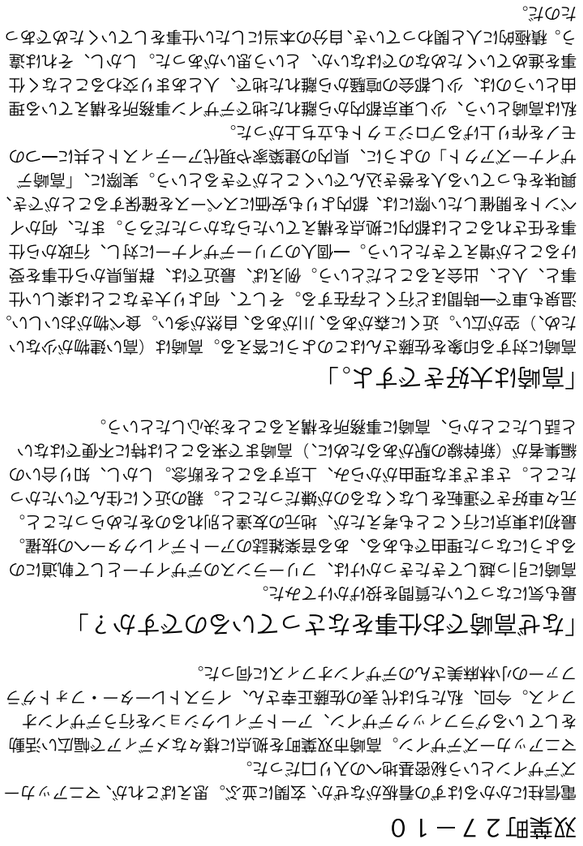
KAZARU KAGAWA
HIROMI OCHIAI
TATSUHIKO IIDA

慶應義塾大学 加藤文俊研究室
高崎フィールドワーク　2010年5月15日～16日
http://vanotica.net/takap1/

流儀（ファッション）

Special thanks,
FUBUKI TAKEZAWA

vanotica



オフィスに広がるモノたちは一見、何の関係も見えてこないように思えるが、佐藤さんはこれらすべてからインスピレーションを受けているという。

「あらゆるものが資料にしかみえない。」

おもむろに見せてくれたのは、戦前にだれか全く知らない人が書いた手紙。今では見ることができないような特徴的な文字体を見ることができる。有名なデザイナーが作ったもの以上に、誰か名も知らぬ一般の人が生み出す文字も参考にしているという。また、常にカメラを持ち歩き、町を歩いていて目につくものを記録していたり、友達でどこか面白い・かわいいと感じた文字を書く人に対しては協力をお願いし、その人の手書き文字を元にしたフォントを作成したりと、身近なものから新しい文字を生み出していくこともあるという。

「強みは案の多さ。」

マニアッカーズデザインの強みをこう語る佐藤さん。今まで作ってきたフォントの種類は３００種類以上。それらを元に、新しいアイデアを生みだしていく。一つの案件に対しても数十種類の提案をつくりクライアントに見せることもできるという。こうした、文字を中心にデザインを展開していきた理由は、「文字というのは、あらゆるグラフィックデザインに使われるものであり、タイポグラフィに強みを持っていれば、様々なメディアに応用できる。」からだ。

これから

展望としては、自らのフォント・グラフィックデザインと小林さんのイラストをアニメーション化することによって、一つの作品としてパッケージ化することができればと夢見ている。最近はインターネットを通じ、海外からの仕事が多くなってきている。高崎の仲間とのローカルな仕事から、海外とのグローバルな仕事まで、マニアッカーズデザインの活躍は幅広い。近いうち、この秘密基地から世界中をしあわせにさせるようなアニメーションが生まれていくことを期待し、部屋を後にした。

生み出したモノ

生れ出る場

双葉町２７−１０

電信柱にかかるはずの看板がなぜか、玄関に並ぶ。思えばこれが、マニアッカーズという秘密基地への入り口だった。

マニアッカーズ。高崎市双葉町を拠点に様々なメディアで幅広い活動をしているグラフィックデザイナー、アートディレクターのオフィスに足を踏みいれた。今回、私たちは代表の佐藤正幸さん、イラストレーター・フォトグラファーの小林麻美さんのデザインオフィスに伺った。

「なぜ高崎でお仕事をなさっているのですか？」

最も気になっていた質問を投げかけてみた。

高崎に引っ越してきたきっかけは、フリーランスのデザイナーとして軌道にのるようになった理由でもある、ある音楽雑誌のアートディレクターへの抜擢。最初は東京に行くこともあったが、地元の友達と別れるのをためらったこと。元々車好きで運転をしたくなるのが嫌だったこと。親の近くに住んでいたかったこと。さまざまな理由がからみ、上京することを断念。しかし、知り合いの編集者が（新幹線の駅があるために）高崎まで来ることは特に不便ではないと話したことから、高崎に事務所を構えることを決心したという。

「高崎は大好きですよ。」

高崎に対する印象を佐藤さんはこのように答える。高崎は（高い建物が少ない温泉も車で一時間ほど行くと存在する。そして、何より大きなことは楽しいサ事と、人と、出会えることだという。例えば、最近では、群馬県からお仕事を受けることが増えてきたという。一個人のフリーデザイナーに対し、行政からお仕事を任されることは都内に拠点を構えていたらなかったであろう。また、何かイベントを開催したい際には、都内よりも安価にスペースを確保することができ、興味をもっている人を巻込んでいくことができるという。実際に、「高崎デザイナークラブ」のように、県内の建築家や現代アーティストと共に一つのモノを作り上げるプロジェクトも立ち上がった。

私は高崎という、少し東京都内から離れた地でデザイン事務所を構えている理由というと、少し都会の喧騒から離れた地で、人とあまり交わることなく仕事を進めていくためなのではないか、という思いがあった。しかし、それは違う。積極的に人と関わっていき、自分の本当にしたいお仕事をしていくためであったのだ。

秘密基地のような仕事場

デザイナーのオフィスというと、シンプルで整理された（時には、整理されすぎて落ち着かない）空間が広がっているというステレオタイプを私は一方的に思い描いていた。だからこそ、佐藤さんのオフィスに足を踏みいれたとき、私は仕事場という印象は受けず、なにか秘密基地のような場所に来たようだ。そして、実際に私はわくわくとした気持ちを抑えきることができなかった。

壁一面に広がる本棚。佐藤雅彦や筒内道彦といった、近年有名となっているクリーナーデイバイスの本や、一冊一万円もするような古い外国のデザインに関する本。小説からテレビゲームの攻略本まで。本棚にはびっしりと本が並べられている。いや、本棚だけでなく、入りきらなかった本が床に高く積み上げられている。そして、部屋の反対側には CD が同じく壁一面にびっしりと並んでいて、その前には昔懐かしいブニメのキャラクターの人形や、おもちゃが飾られている。部屋の隅にはガチャガチャの機械も。（実際に動くようになっており、中にはマニアックカーデザインの特製のボストンバッグやバイクが入っている。）さらに奥の部屋に向かえば、DJ 用の音楽機器や、これまた昔懐かしいテレビゲームの本体やソフトが飾られていた。そう、佐藤さんがこれまで集めてきたモノがおもちゃ箱のようにこの部屋に詰まっており、佐藤さんはこの好きなモノに囲まれた環境の中で仕事を進めているのだ。

私はこの空間がとても特殊なように感じた。高崎の駅から離れ、住宅が立ち並ぶ町のなかに、このような異世界が広がっていたのだ。唯一、高崎という場所であることを感じるのは、窓の外の景色―それは別にたんら変わりない（というよりもどちらかというと古めの）隣の軒下や電車の操車庫が見えるということ。「おもちゃ箱」な空間に圧倒されていた私は、普通の日常が広がる窓の外だけが、なにかぽっかりと浮いて見えた。

愛してるぜっ！！

正直に言うととても難しい。文章を生業にしている人にインタビューして、自分が文章を書くなんて。「学生なんだから気負わずにやればいいじゃん。」と思われるかもしれないが、本当に悩んでいるのだ。

絲山さんはとても優しい人だ。ご自身の作品や高崎という土地について、さらに日常生活や恋愛についてまでも予定をはるかに越えるインタビュー時間で語ってくださった。3時間、私たちは惜しみなく与え続けられた。処理しきれないほどの量と質の詰まった情報で私の脳みそも気持ちもいっぱいだ。これほどまでに全エネルギーを注いで、私たちに応える絲山さんに、どうしてこのインタビューを受けて下さったのかと尋ねると「奨学金を返しているつもりだ。」という言葉で答えが返ってきた。その言葉を聞いただけで私たちは安心して幸せな気持ちになることができた。

そして、絲山さんは冷たいクールな面も持ち合わせている。人は誰でも色んな側面を持っていて一筋縄ではいかないことを、改めて気づかされる時間でもあった。絲山さんの優しさとクールさをどう表現するべきか、あの濃密なインタビューをこの小冊子にまとめることができるのか、私たちは時間をかけて話し合った。本来、この様な過程は公開すべきものではないかもしれないが、私たちにとっての絲山さんは、この悩んだ時間にこそあると思った。

料理をするときに器を選ぶように、小説を書くときに文体を選ぶように、絲山さんは高崎を選んだのだ。インタビューの間、タバコを手放さなかった絲山さんの灰皿の横に寄り添う榛名牧場牛乳。まるで、絲山さんと群馬・高崎の関係を見ているようだった。

「料理のときにお皿を選ぶみたいに、
そのお話に合う文体を選ぶ。」

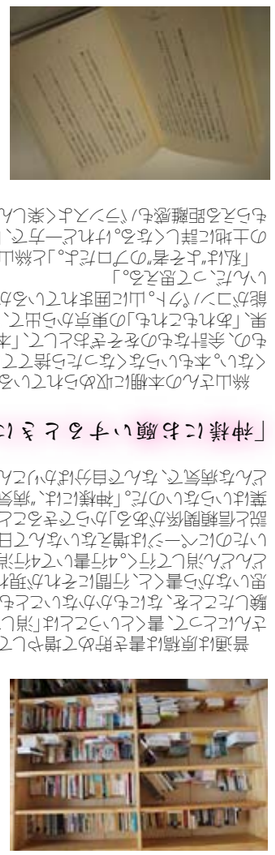
慶應義塾大学 加藤文俊研究室
高崎フィールドワーク　2010年５月15日～16日
http://vanotica.net/takap1/

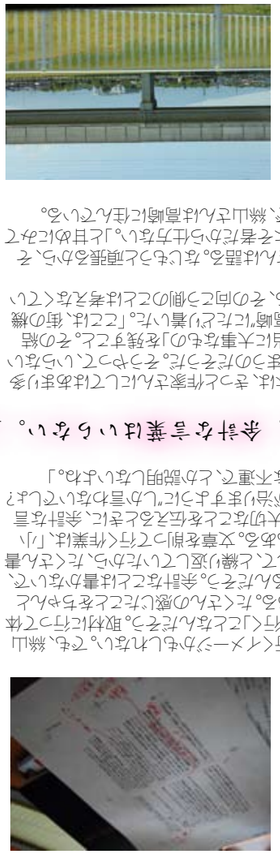
制作　仲尾千枝　小林みずほ　澤田忍
絲山秋子さん、本当にありがとうございました。

消していったら、高崎に着いた。

絲山さんは、高崎に「着いた」のだった。東京で生まれ、最初がメーカーに勤務したら、いくつかの地に転勤を繰り返し、作家になったのち、高崎に住むことにした。今は永住を決めて、素敵な一軒家を建てて住んでいる。

絲山さんの本は、書店に平積みにされ、店員さんにおすすめされたり、ポップつき紹介されている。映画化されたものもある。そんな物語たちは、最初は手書きの文章をメモから生まれ、その後パソコンで文章にされている。メモは、パソコンで書く段階で使ったら、パソで消される。「一日中パソコンに向かうのは、まるでイヤフォンみたいなずっと台に向きなってると、確変が起きる」――いい文章が思いつかぶ保障はないけど、パソコンの前で粘るんだそう。





普通は原稿は書き貯めて増やしてイメージがもしたいって、でも、絲山さんはこって、書くことは「消してく」ことなんだそう。取材に行って体験したことを、なにもかがたいてもある。そこでこんの感じたことをちゃんと思いながら書くと、行間にそれが現れるんだそう。会計なことは書けないで、どんどん消してく。4行書いて4行消して、と繰り返していたから、たくさん書いたのにページは増えないんで日もある。文章を削って行く作業は、「ノ」設定信頼関係がある人からできること。大切なことを伝えるさに、余計な言葉はいらないのだ。「神様には、“病気が治りますように”しか言わないでしょ？どんな病気で、なんで自分ばかりこんな不運で、とか説明しないよね。」

「神様にお願いするときに、余計な言葉はいらない。」

絲山さんの本棚に収められている本は、きっと作家さんにとっては本当多くないと本もいらないなったら捨ててしまうのだそうだ。そうやっていらないもの、余計なものをそぎおとして、「本当に大事なもの」を残すことで、その結果、「あれもこれも」の東京から出て、“高崎”にたどり着いた。ここは、街の機能がコンパクトに凝縮されているから、その向こう側のことは考えなくていいんだ、って思えるし。

「私は“よそ者”のプロだよ」と絲山さんは語る。なじもうと頑張るから、その土地に詳しくなる。けれど一方で、「よそ者だからだけ方ない」と甘めにみてもらえる距離感もバランスよく、楽しんで、絲山さんは高崎に住んでいる。

絲山さんは群馬ではノ説家としてだけではなく、FM群馬でラジオパーソナリティとしても活躍している。絲山さんはリスナーは相思相愛だ。「ラジオの仕事をしているとき、私はこの地域にとても根付いていると感じる」という絲山さんの言葉どおり、番組はリスナーからも送られてきた絲山さんのキャッチフレーズが、そのまま著作の帯の言葉として使われるほどに絲山さんとリスナーの距離は近い。「ラジオはラストーク」という言葉から、絲山さんの声を待っているリスナーと、それに応えたいと思っている絲山さんの想いが見えた。実際、私たちが本屋に赴いて絲山さんについて伺った際も「私、ラジオよく聞いているんです。ラストトークーとの掛け合いが面白いんです よ」と書店員さんが仕事の手を止めて話をしてくれた姿が印象的だった。

書いた文章が形として残されてい く本、発した声がその場で舞まれていくラジオ。残るものと消えるものの、異なる性質のメディアを扱っていくなかで、絲山さんの姿勢は一貫していた。「ラジオがその場で消えていくなかで、文学も消していくこと」としっかりとした口調で語った。ラジオはたまたまその時間に聴いていた人と時間を共有する。人間しているリリスナーかもしれない。自分がいてんでいる場合じゃない。その気持ちが絲山さんをマイクに向かわせているのだと感じられた。全く別物のように見えるが、絲山さんの中では「相手によって消化されるもの」といいしっかりとした軸で繋がっていた。

ラジオは、昨日親が死んだ人も聴いているかもしれない。

ちょうどいい場所。絲山さんは自分にとっての高崎を一言でこう表現した。高崎にまつわる、あらゆるとが絲山さんにとって心地よい距離感で保たれている。電車2時間で繋がる高崎と東京。繋がりが濃いわりにベタベタしていない地元の人々。「ちょうどいい」場所である高崎は、絲山さんの生活にゆしずつ変化をもたらしている。

近所の人からいただく旬の野菜を、地元の人しか知らない調理方法で食べる。次第に体が旬に近づいていくことを実感していく。昨年から飼い始めたネコの“ちゃいる”。（名前の由来は見た目そのまま の様子から）とネコ事をひと時を過ごす。お気に入りの車で街を通ら すにドライブをする。

そして、自分の家から見える景色が美しい。太陽の昇降の様子で、いつも同じ場所にあるはずの山が日々表情を変える。その様子を見ていると、こんな贅沢はきっと自分にとっての「ちょうどいい場所」でしか味わえないのだろう。

「体のメンテナンスが野菜になる。」

「一生、保証します」

vanotica

慶應義塾大学 加藤文俊研究室

高崎フィールドワーク　2010年5月15日〜18日

http://vanotica.net/takap1/

企画／編集

水谷　晃毅　・　南　美帆

漫画

木村　健世（アーティスト）

取材先

サイクルテックIKD

My Bike

こーき（20歳・学生）

車種：Pocket Rocket Pro　（イタリア製）

価格：40万円

「通学にも使いつつ、アクティブに乗りまわせるものがいい」という要望をもとに、街中を走るレースタイプのモデルを選んでいただいた。白いボディに、18段ギアを搭載。ハンドルはグリップ感があり、まるでマウンテンバイクのよう。しかしタイヤは舗装された道路に合わせてあるので、荒々しさを全く感じさせない、滑らかな乗り心地だった。イタリア製のため、値段は他のものより少し高くなっている。初任給だけでも足りないし…最初のボーナスが出たら買おう。

きむら（40歳・アーティスト）

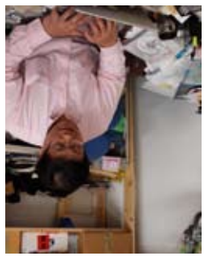
車種：Pocket Crusoe（アメリカ製）

価格：20万円

「車に乗るようになってから、自転車にはほとんど乗らなくなってしまった」という木村さん。だがその一方で、最近では通勤に自転車を使う人も増えている。このモデルはそんなニーズに応え、スーツにも合わせやすいようわりと地味な色遣いながら、そのスペックは本物。乗り心地は、木村さんのはしゃぎ方を見てほしい。自転車に乗る楽しみは、年齢を問わない。大人の男が、少年に戻った瞬間である。

TEAM IKD

―19年目も走り続けるー



「自転車は、携帯電話みたいなものだね」車も免許も持っていない、趣味も生活も、自転車がほとんど。自転車片手に世界各国をまわり、十数カ国を訪れた。「言葉が喋れなくても、切符が買えなくても、自転車さえあれば なんとかなる」まさに自転車旅行のエキスパートだ。数ある愛車の中でもBROMPTONが大好きで、14年間乗り続けている。「元が良いので特別いじる必要がない。ある意味で、趣味の自転車かな」笑顔でそう語る古田さんから、「趣味」への大きな愛着を感じた。

「手を動かすのが専門なので」

自転車に乗る姿も、自転車を整備する姿も様になる。それもそのはず、元・競輪選手なのだ。二十数年に渡り第一線で活躍し、いまはエンジニアとして自転車と関わる毎日。店長の古田さんとは対照的に、自転車を持ってあちこちに行くことはほとんどない。通勤で乗る際も、なんだか「タイムを気にしてしまう。ゆっくり・のんびりとまることができない、まさに競輪選手ならではの職業病。爽やかな口調の奥には、高いプロ意識があった。

サイクルテックIKDの自転車の価格帯は、平均25万円前後と、通常の自転車販売店よりも高い。最近流行りのカスタマイズに食いつき「ずっ引」なんて言うスタッフに「どうあえず落ち着け、冷静に他の自転車屋と比べろ」と諭すと言う。「自転車がいいよね、というより、自転車もいいよね、だから、自転車だけじゃないわけだし。車とか、電車にも魅力はある」そのスタッフ、買ってもらう時には じっくり時間をかけて、その人に本当に合っている自転車なのかを見極めるという。実際、私たちも少しお話しただけで、どのような自転車が合っているのかを見繕ってもらうことができた。本人には気づいていない部分で合う・合わないがわかるという。どうやって本人にもわからないようなことがわかるんですか？と聞くと、「長い経験だね」とまっぱりと言い切った。

この日も、神奈川県は武蔵小杉から、納車に来たお客さんが。「元々実家にマウンテンバイクがあったりして自転車が好き。通勤や休みの日用し、永く使えるものを、と思って来ました。嬉しいですね！行けるところまで乗って帰ります！」